

震災から五年を経過した

東北から — 3

一万八〇〇〇人以上の死者・行方不明者という甚大な被害をもたらした東日本大震災。二〇一六（平成二十八）年三月十一日で五年が経過した。五年前の「あの日」、多くの方々の生活が一変した。あれから五年、被災地は「今」どのような現状なのか。被災地の「今」を伝えることで、「これから」を考えていきたい。

福島県の現状

前々号、前号に震災後の現状について報告した。その際には、岩手・宮城・福

島の三県をまとめて見ていたが、福島県は福島第一原子力発電所事故による被害を大きく受けているという点で他の二県とは現状に大きな隔りがある。そこで福島県の現状に注目したい。前号で参考にしたNHK報道局社会部東日本取材班によるアンケート調査では、復興の遅れを実感している方々は岩手・宮城県の十八%に対して福島県では五十%に上り、震災の心身への影響も福島県では他の二県と比べ七十三%と高い。また、特徴的な数字としては転居の回数を挙げること

ができる。福島県では五回以上転居された方が五十%と非常に高く、しかもそれだけ転居を繰り返したとしても自宅に戻っていない現状がある。

福島県では福島第一原子力発電所事故の影響により、震災後の復旧のめどが立たない場所が多く残され、廃炉作業や汚染土の解消も見通しが立っていない。こうした状況で、避難生活を送る方々がどのような苦しみを抱いているのか。NHK「漂流する避難者」で述べられた言葉を紹介することで、現状の一端を伝えることとしたい。

避難してきたとは言いません。聞かれただら言わざるをえない場合もありますけど、できれば避けています。もうお金は一銭もいらぬ、元の生活に戻る事ができるなら。

双葉郡から避難した六十代の夫婦は、各地を転々とする避難生活に疲れ果て、いわき市に移住を決断。ようやく手にしたはずの落ち着いた生活。しかし、かえって不安は大きくなったと語る。親しい友人にも賠償金のことを尋

ねられた経験などから、常に「避難者」として見られていることが大きなストレスとなっている。

住み慣れた土地から離れ、いつ帰れるともわからない状況の中で、「避難者」として他人から見られることをストレスに感じながら「避難」を続ける。これがどれほどの辛さ、悲しさであるか想像に難くない。

人や社会に潜む暴力―構造的暴力―

避難者の方々の言葉を聞いて、思い出すことがある。総合研究所では、『宗報』二〇一五（平成二十七年）年十一月・十二月合併号に「平和に関する論点整理」を発表した。その中で「積極的平和」という概念に言及している。これは、国家間に戦争がない状態（消極的平和）に対して、争いの原因となる構造的な問題、例えば飢餓・貧困、差別・不平等、環境問題、人権軽視などが無い状態を言い表した言葉である。「友人にも賠償金をことを尋ねられた」という言葉を見ると、私た

共通の話題にする日が来ることを念じている。

どれほど活動をしようと、活動から漏れている方々が存在する。誰もが当然のことであり、しようがないと思うかもしれない。しかしながら、被災地の方々が被災地以外との絆が弱まったと答えたこと（前号で紹介）や、避難生活を続けながらも避難者として暮らしていくことの不自由さの訴えを聞き、知ってしまったとき、「漏れている方々」にどのようにして「縁——つながり」を広げていくかを今だからこそ考えなければならぬであろう。そのためには継続性とともに新たな取り組みが必要になってくるはずである。その際、どういう取り組みが可能であるのか、と、どういう理念や考えのもとで行動するのか、という問いかけができる。前者に対しては、本願寺派だけでなく、様々なところで、様々な方々が活動されている。ここではそうした活動ではなく、後者の理念や考え、という点について述べておきたい。

ちは、本当に被災者・避難者のことを思い、考え、行動し、言葉を発していたのか、思い返さなくてはならないだろう。何気ない言葉や視線を向ける／向けられるという態度ですら、誰かを傷つける可能性があるとすることは、誰もが経験したことであるはずである。「原発いじめ」という言葉がくり出されてしまった今、無自覚に、知らないうちに、人々を傷つけてしまうような「私自身」に目を向ける必要があるだろう（『中外日報』では、二〇一六年十二月十六日付の社説で「原発いじめ」の問題、社会の根に抑圧の構造」とある）。「平和に関する論点整理」ではそのことを指摘して次のようにいつている。

愚かで、自分への執着（我執）、自分ものへの執着（我所執）を捨てられず、利己的な在り方から容易に離れられないという視座

（『平和に関する論点整理』）
自己中心性と他者への暴力は無関係ではない。岩手・宮城・福島県の現状

忘れない——記憶

同志社大学の小原克博教授は、現代における宗教の固有の役割は、世俗的な秩序や公益に換言されない役割と自由を自覚することにあるのではないかと述べて、特に強調するものとして「記憶」を挙げている。

膨大な情報に取り囲まれながら、しかしそれゆえに記憶喪失に陥りやすい現代社会において、世代を超えて記憶するということ高度に身体的な行為を宗教が担っていくことができるのであれば、それをポスト三・一一の宗教の役割の一つに数えてよいのではないか。

（『アンジャリ』二十五号、二〇一三）
小原教授は、伝統宗教が行う大遠忌を念頭に、共同体が儀礼化・身体化していく中で記憶が継承されることに注目している。

時間が経過することによって記憶は薄れ、震災という出来事であっても過去の出来事となってしまふことは避けられないのか

は、私たちに「自己中心性」の問題を突きつけていると言えるかもしれない。

届いていないところへ

東北教区、福島市にある福島県復興支援宗務事務所では法話会を行っている。仮設住宅からの送迎を行うことで、より多くのご門徒に参加していただく機会を設けている。法話会に出席されたご住職が次のような言葉を述べられた。「外に出てきている人はある程度元気な人で、こうした法話会に来ていない人がより心配だ」。この言葉は、支援やケア、絆といったつながりから漏れている方々が存在することへの危惧と受け取ることができる。元総合研究所研究員の金澤豊氏が書いた震災レポート「支援の行き届かないところへ」（『本願寺新報』二〇一三年三月号）の中に次のような一節がある。

さまざまな支援の形があるが、完璧な支援活動は存在しない。常に支援の輪から漏れている人がいるということ、被災地で尽力する多くの支援者が

もしれない。しかし、そうだからこそ震災の経験や震災からえた教訓を次世代へと引き継ぐ役割は誰かが担わなければならない。そうしたとき、震災を「忘れない」という思いとともに、どこまでも被災者・避難者の方々に「忘れさせてはならない」という思いをもってそれぞれの分野で活動していくことが大切なのではないだろうか。

本願寺派における東北地方での活動については、

- ・本願寺HP「東日本大震災における本願寺の取り組み」(<http://www.hongwanji.or.jp/project/saigai01.html>)
- ・東北教区ボランティアセンターHP (<http://otera-vc.jindo.com/>)

・総合研究所HP「東日本大震災被災地での活動報告」(http://i-soken.jp/category/topics/topics_2)
などを一瞥ください。

（総合研究所研究員 岡崎秀麿）